

令和2年度 学校・家庭・地域連携サポート事業

地域学校協働研修会

(地域学校協働活動の部)

主催：福島県教育委員会

- 目的： 地域学校協働本部事業についての講話や実践発表、研究協議等を通して情報交換を行い、事業に携わる地域連携担当教職員やコーディネーター、ボランティア人材の資質向上を図る。
- 日時：令和2年10月28日（水）13：20～16：00
- 場所：杉妻会館

講話 「学校支援から、地域と学校における双方向の連携・協働へ」

福島県教育庁社会教育課 社会教育主事 太田 徹

1 予測不可能な変化の激しい社会の中で生き抜くために

(1) なぜ、今、地域と学校の連携・協働なのか

予測不可能な変化の激しい社会（Society5.0）で生き抜く力を身につけるために地域と学校の連携・協働が必要である。

Society5.0 で実現する社会とは

- ・ IoT で全ての人とモノがつながり、新たな価値が生まれる社会
- ・ イノベーションにより様々なニーズに対応できる社会
- ・ AIにより必要な情報が必要な時に提供される社会
- ・ ロボットや自動走行車などの技術で人の可能性がより広がる変化の激しい社会

(2) 子どもたちが生きるこれからの社会

少子高齢化により社会は激しく変化している。人口減少、財政難等の課題も深刻化している。少子化と人口流出により、若年女性人口が半分以下となり生産年齢人口は、半数に減少している。また、グローバル化、情報化等により、変化が激しく予測困難な社会になるであろうと思われる。



- ・ 今後10～20年で、日本の労働人口の約49%が、技術的には人工知能やロボット等により代替できるようになる可能性が高い。

(マイケル・A・オズボーン氏：オックスフォード大学准教授)

- ・ 子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就くであろう。

(キャシー・デビッドソン氏：ニューヨーク市立大学大学院センター教授)

将来においても人が担う業務は、創造性が必要な業務、協調性が必要な業務、非定型な業務であ

ると考えられている。

(3) 社会の変化と求められる人材育成

「知識基盤社会」の到来や、グローバル化、情報化、少子化、高齢化、社会全体の高学歴化等を背景に、社会構造の大きな変動期にある。既存知の継承だけでなく未来知を創造できる高い資質能力を有する人材を育成することが極めて重要な課題である。

2 求められる力を身につけるために

(1) Society5.0の時代に求められる力

自己肯定感、コミュニケーション力、想像力、創造力、忍耐力、自信、意欲・情熱、社交性・協調性、共感力が必要となってくる。

(2) 地域学校協働活動を通して学べる事

放課後の学び、異年齢集団での交流、体験活動、ボランティア活動、様々な人々との交流などの活動を通じた、他者との協働体験、成功と失敗の体験、多様性の理解、人々とのコミュニケーションを地域学校協働活動の中で学ぶ事ができる。

(3) 子どもたちに求められる力

① 主体的に課題と向き合い、それを乗り越える力

② 他者と協働して解決に向け行動するための思考力・判断力・表現力

(4) 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則から

主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要である。これらは、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含む。こうした力は、社会や生活の中で児童生徒が様々な困難に直面する可能性を低くしたり、直面した困難への対処方法を見いだしたりできるようにすることにつながる重要な力である。また、多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するものも幅広く含まれる。

我が国の学校教育の豊かな実践を生かし、体験活動を含めて、社会や世界との関わりの中で、学んだことの意義を実感できるような学習活動を充実させていくことが重要である。

3 地域と学校の連携・協働

(1) 国の動向

① 法律の策定・改正

ア 地域学校協働活動の推進

- ・ 平成27年12月中央教育審議会
- ・ 平成28年1月『「次世代の学校・地域」創生プラン』

イ 社会に開かれた教育課程の実現

- ・ 平成29年新学習指導要領（小中）告示

ウ 地域住民等と学校の連携協力体制の整備

- ・ 平成29年3月社会教育法の改正
- ・ 平成29年4月地域学校協働活動の推進に向けた「ガイドライン」の策定

② 地域学校協働活動の推進～「支援」から「連携・協働」～

ア 地域住民、保護者、PTA、NPO、民間企業等による個別の活動→各種団体・個人の総合化・ネットワーク化へ。

イ 学校支援とは

学校のニーズに合わせて、地域人材等の協力を得る一方的な関係。地域と学校がそれぞれ「第三者」であり、バラバラな目標に向かうと「貸し借り」の関係になってしまう。「貸し借り」の



関係は、差があると感じられると不平・不満につながる。

ウ 協働とは

立場の異なる人たちが、同じ目的のために対等の立場で協力して共に働くこと。

エ 相互補完的な連携・協働

地域と学校が連携・協働する事で、社会総がかりでの教育を進める。

③ 地域学校協働活動推進員の委嘱

地域学校協働活動に関し、地域住民等との情報共有や助言等を行う。

(2) 県の動向

① 頑張る学校応援プラン（平成29年3月策定、令和2年3月一部改訂）

「地域と共にある学校」を掲げ、学校任せではなく、地域社会と学校が一体となって子どもを育てるとともに学校も地域に貢献する体制づくりを進める。

② 地域学校協働活動事業

ア 地域への貢献→文化の伝承、町の行事への協力、地域住民との協働によるボランティア活動

イ 特色のある教育活動としての教育課程への位置付け

(3) 連携・協働の効果

① 児童生徒→学力向上の基盤づくり、地域への理解・関心の深まり、社会性の育成

② 学校・教職員→授業内容の充実、地域との信頼関係の構築、地域への理解の深まり、多忙化解消

③ 地域→地域の教育力向上、地域コミュニティの活性化、地域住民の生きがいづくりや自己実現

(5) 地域連携担当教職員任命の効果

① 学校側の窓口の明確化

② 計画的な地域連携・協働の推進

③ 効率的な運営

④ 組織的、継続的な地域とのつながりの構築

⑤ 教育活動の充実について考える契機

講 話 「西会津町地域学校協働本部の取組について」

西会津町教育委員会学校教育課学校支援係長 小林 和洋 氏

西会津町立西会津小学校地域連携担当教職員 山口 弘 氏

1 町の教育施設と教育の特徴

(1) 教育施設

① 西会津中学校・・・平成14年に町内の4校が統合、生徒数約100名。

② 西会津小学校・・・平成24年に町内の5校が統合、児童数約200名。

③ こゆりこども園・・・平成29年、3保育所が統合、園児数約150名。

(2) 教育の特徴

学校を核とした地域づくりを推進し、地域ぐるみでの子育てを行っている。令和2年度から小中学校がコミュニティ・スクール化している。

さらに、ICT教育をいち早く導入し、きめ細かな学習と主体的な学びをサポートしている。

2 地域学校協働本部事業

(1) 学校応援事業・・・学校を支援するボランティア活動



- ① 登下校の安全指導
 - ② 授業の支援
 - ③ 部活動の支援
 - (2) 放課後子ども教室事業・・・子どもが安心して活動できる場の確保、児童の健全育成
 - ① 平日、放課後の体験活動や読み聞かせ
 - ② 休日・長期休業日の体験活動
 - (3) 学習支援活動事業
 - ① 学期末テスト対策学習会（中学校）
 - ② 夏休み学習会（小学校）
 - ③ 漢字検定の実施
 - (4) 家庭教育支援事業・・・家庭教育に関する相談と情報提供
 - ① 家庭教育相談室「こころのオアシス」を設置
昨年度は、1,331人の利用があった。家庭教育講座・親子参加イベントの開催や食育活動、企業訪問を行っている。
 - (5) 地域交流事業・・・地域の行事やイベントへの参加、地域の大人との交流
 - ① ボランティア活動
 - ② 地域活動
 - ③ 高齢者サロンとの交流
- 3 地域学校協働本部事業の取り組みによる変容



- (1) 地元への愛着
子どもと地域の大人との交流が増えた。
- (2) 地域力の向上
個人や団体など、大人同士のつながりが増えた。
- (3) 生きる力の育成
多様な学びや充実した活動につながった。

4 西会津小学校地域連携教職員として

- (1) 地域連携教職員としての役割
 - ① 各学年の地域活用の要望を集約
 - ② 管理職との綿密な打合せ・検討

- ③ 地域コーディネーター等と連携・共通理解
- ④ 地域の願いを知り、活動のねらいを明確にして実施

(2) 校外学習関係書類のデータ化

- ① 校外学習実施案
- ② コーディネーター依頼書
- ③ バス申請書
- ④ 見学依頼書
- ⑤ 実施報告書

(3) 地域連携担当教職員としての課題

- ① 学校で唯一の窓口という意識
- ② 教職員の要望を集約
- ③ 地域の願いの理解
- ④ 活動のねらいの明確化
- ⑤ 地域コーディネーターと常に共通理解を図る
- ⑥ 次年度へ向けてのシステム化



グループ協議 「本音で語り合う地域学校協働活動～地域も学校も伸びていくために～」

1 課題を出し合っの意見交換

(1) 現状

- 学校がいかにして地域に貢献していくか。地域と学校と一緒に活動していくことで、地域行事に参加するだけでなく、地域で学習したことを発信していきたい。
- 学校の要望を伝え、要望に応じていただいているが、地域の方々の願いがよく分からない。地域の方の話聞く機会を設けることで地域の思いや願いが見えてくるのではないか。
- 部活動指導、小学校の陸上指導など、教員が担当するのではなく、クラブチーム等での対応をしている所もある。
- 学習センターの中にコーディネーターがいるのでやりやすい。学校と地域で思いや願いをどのように共有していくか、学校の要望とボランティアとのマッチングについて今後も考える必要がある。
- 地区でモデル事業を計画している。時間をかけて新たな動きを理解してもらうようにしている。
- コミュニティ・スクールの体制がととのっているが、高齢者のボランティアが多いのでコロナ禍の今、関わる事ができるのか心配である。
- 地域と学校をつなげる地域連携担当教職員として、始めは不安に思ったが考え方が変わった。他の教職員も同様な意見が多かった。地域の方々は前向きで、学校と関わる事を喜んでいる。
- 第三者的立場、学校、教育委員会に関わっていない方々がコーディネーターとして配置されると良い。その際に、高齢者・退職者などの人材活用を図ると良い。
- 地域の町おこしの部署等と学校との連携が今後ますます必要になるのではないか。
- ボランティアの意見を取り入れた活動を考えていけたら良いと思った。
- 学校教育を通して地域を担う人材を育てる。それが、地域を育てる一端を担うことになる。



(2) 課題

- ボランティアの高齢化やニーズに合った講師が地区にあまりいない。交通費等の関係もあり、どこからでも呼べるわけではない。
- 地域連携担当教職員だが、教頭・教務が地域との連絡調整をする事も多く、何をすべきか分からない時がある。
- 社会教育、学校教育としての境がよく分からない。どう連携すれば良いのか。
- コミュニティ・スクールの活用を考慮していきたい。
- 学校教育と社会教育相互に情報共有が必要である。



- 学校、学年が地域学校協働活動の事業を全て進めるのが大変である。窓口が他にあると助かる。
- 地域との連携はあまり進んでいるとは言えない。ボランティアとの交渉は、コーディネーターを通さず、学校側で直接行っている。コーディネーターがどこにいるのかわからない。
- 協力してくれるボランティアが必要としている人材なのか打ち合わせをしっかりと行う必要がある。

- 活動の教育的価値を検討して実施する必要がある。
- 人材については、高齢者や同じ人ばかりである。若い保護者は、自分の仕事があって参加するのが難しい。どうにかして若い世代を入れていく必要がある。
- コーディネーターとして、学校に来て教えてもらえる人をコーディネートするが、地域によっては、オーダーされてもボランティア不足のためにマッチングが難しい時がある。

研修会の感想（参加者アンケートから）

- 地域連携を活発に行うためには、学校サイドでは校長や教頭など、管理職の強いリーダーシップがないと難しいのではないのでしょうか。学習センターや自治体の担当者と良い関係が築けていないとお互いの連携を図っていくことも難しいと思います。教員の立場では、何でも自分（担任）がやるという意識から、得意分野を持っている方に大いにお世話になるという意識改革も必要だと思います。
- 学校側がもっと地域との連携に目を向けるべきだと感じました。
- 各自治体の行政からの出席が増えるとさらに面白い会になるのではないかと感じました。つながりをつくることもできそうだと感じました。
- 他県でもコミュニティ・スクールとしての学校のあり方が推進されていると聞いていたので、本県での具体的な取り組みを知ることができ、大変勉強になりました。本校は、学習センターが近くにあるので、今年はコロナでなかなか難しい点もありますが、地域の人材等を積極的に活用していきたいと思います。また、地域との連携という意識を教職員の中に広めていきたいです。
- 本校は、スクールコミュニティがあり、地域との連携がしやすい環境にあります。しかし、今日の講義を聞き「こんな活動ができるのではないか」などのアイデアが生まれました。現在はコロナで活動が縮小されているところも多いですが、今できることシステムの構築や地域行事への参加、協力の推進のための話し合い、地域連携年間活動計画の見直し等に取り組んでいきます。
- オンラインでの参加のため、グループ協議に参加できませんでしたが発表内容から得るものも多く改めて地域との連携・協働が重要であることを感じました。オンラインでの参加は、移動時間も無く有効的なことも多いので続けてほしいと思いました。
- 地域や校種によって、課題が大きく異なるのではないかと感じます。他地区の情報を知ることが大切ですが、それ以上に自分たちの地域内で、学校、地域、教育委員会、公民館や学習センターが密にやりとりし、関係を築くことが大切のように思います。
- 西会津の地域学校協働本部の取り組みについて初めて知ることが多かったです。校外学習の書類のデータ化は小さな事でも大切だと思うので、取り入れていきたいところだなと思いました。
- 各班の意見交換を伺って、自分が疑問に思ったことを他の方も同様に感じていたことが分かりました。地域連携をする難しさはありますが、教員の負担が増えないように進めることが、これからの課題だと思います。
- 西会津町の取り組みは大変参考になりました。地域の人材を有効に活用して、地域で子どもを教育する理想的な形だと思います。ただ、一町一校だからこそできる取り組みであり、ある程度大きな市になると同じような取り組みをするには、まだまだ課題が多いように感じました。
- 地域と学校がWIN WINになるためにはどうしたらよいか。地域連携担当教員の立場はどうあればよいか。考えていく必要があると感じました。
- 今後コミュニティスクールを進めていく上で大変参考になりました。実践例や課題がいろいろと出されたのはとても有意義でした。まだまだ分からない事も多いので、このような機会はとてもいいと



思います。ありがとうございました。

- 本校も地域との連携が強く、スキー、登山等の活動を行っています。本日の研修における学習支援活動、地域交流事業等の話はとても参考になりました。
- 地域コーディネーターの重要性を強く感じました。人材、予算、継続性、学校の思い、地域の願いを理解している人が適任だと考えます。
- 地域や学校によって協働の形態がかなり違っていることが分かり参考になりました。なかなか他域の立場の方のお話を聞く機会が無かったので参加してとても良かったです。
- 講話をいただき、地域と学校との連携・協働の意義、必要性がよく分かりました。地域→学校が中心ですが学校→地域へとボランティア活動などで交流することも考えていきたいと思います。
- 学校の立場としては、やはり地域の協力を得る以上、地域に対しても何か貢献できるものが無いといけないということを痛切に感じました。また、学校と地域が協働で何か行う場合は相互にメリットがあるものでないといけないということを肝に銘じていきたいと思います。
- 地域連携担当教職員を担当して、その業務内容についてとても疑問があったのですが、今日の研修会で、「地域をつなぐパイプ役になるのかな？」と考えることができました。